

エクストリームシリーズ 2014 奥多摩大会

奥多摩大会 3名カテゴリー 優勝チームコメント

とれいるざんまい 杉田明日香さん

「頑張ってたよかった。」と心から実感しています。
久保田さん、杉山さん、本当にありがとうございました。

スタートした直後のチームチャレンジでは、「スラックライン」のセクションが。
これはきっと順番待ちをすることになるだろう。と久保田さんと杉山さん。
なるべく早くこのセクションを通過するために、こっち回りで行こうとコース決定。
CP1～CP4までは、順不同に回ってよいランのセクション。
スラックラインでは、ゆっくり確実に。自然物での造形作業は、話し合いながら楽しく制作。
ここからCP8のカヤックまでは、MTB。コナ・ウィンとスパモニ探検隊と順位を争いながら、ほぼ同着でCP8に到着。
カヤックでは不安はあったものの、落ち着いて漕ぐように心掛けた。
久保田さんと杉山さんは、相変わらず安定感抜群だ。
コナ・ウィンの幹久さんと水の上ですれ違った時に、
「みっきーさんが沈ませんよーに。でも早くはこないでください。」とこっそり願ってみた。

2名エントリーのスパモニ探検隊に続いて、CP9へ向けて出発。が、CP9が全く見当たらない。
指示書を見ると、「スタッフがいます」とのこと。
リーダー久保田さんが、「ん？絶対ここだよな。なんでスタッフいないんだ？」といいながら、
更に上の方へ登っていく。先の尾根まで出る辺りで、「やっぱり違う」と。
そうこうしているうちに、何チームかと合流することになる。
どのチームも「ここだよな」といいながらも、それぞれCPを探す。
ふと気づくと、さっきまで一緒にいた竹トレらん部のさすけくん、直子さんたちがいない！
「くそー。先にこっそり見つけてささっと姿をくらましたんだな！やられたぜ。」と思うが、
こういう所がアドベンチャーレースの面白さだよなア。
やっとCP9をとり、再びMTBでCP10、CP11へ。
その後は、CP16までトレッキング。ここからが私にとって長い戦いとなる。
つづら折の山道の登りでは、すぐ後ろにコナ・ウィンの姿が見え隠れする。
いや、気付くとどんどん近づいている。
その脅威はおそろしく、私は追いつかれてしまう恐怖におびえながら、必死に前に進む。
しかし、だんだんペースが落ちてくる。そんな私を杉山さん押してくれ、嬉しかった。
久保田さんが、荷物を持ってくれ、「あとMだ」と声をかけてくれ、心が折れずに踏ん張れた。
山頂からの下りは、私のへっぴり腰に久保田さんも杉山さんも失笑。うう、すみません。。
久保田さん、杉山さんはもちろん、道向さんも幹久さんもみどりさんも、皆速すぎる。
自分の中でのMAXスピードで走ったものの、やっぱり遅れてしまう自分に悲しさが募る。
CP16を一瞬にして出て、さっさとMTBへまたがる。

CP16からCP17は、MTBでの最後の登り坂。
コナ・ウィンの追いつかれませぬように。と祈りながら進む。
この登りで勝負をする。ということが、なんとなく分かっていた。
久保田さんがガシガシ牽引してくれる。相変わらず頼もしくてカッコいい。
「ハンドルをまっすぐしろ」を指示を出してくれるが、ブレてしまう。
この苦しい登り坂の途中で、「この苦しみは今しか味わえないんだな。ありがたいな。」
とペダルを回しながら考えていた。
そろそろCP17だなと思っていた所で、スパモニ探検隊が下りてきた。

篤さんの「え?!」という表情が今でも忘れられない。(こんなに迫っているとは思わなかったと、レース後に聞いた。)

下りきって、あとはゴールまでの舗装路だ。地味に登ったり下ったりを繰り返すが、これがなかなかきつい。最後のゴール目の坂は、久保田さん、杉山さんに押しもらい、ゴール！
すぐに水道で顔を洗ったのだが、それは涙を隠すためだったことは秘密にしておこう。

スパモニ探検隊、コナ・ウインのメンバーと、お互いの健闘を称え合い、熱い握手をした。

この瞬間が幸せだ。

表彰式直前、夕暮れ時の藍色をした空と山並みが美しく、さわやかな風を身体全身で感じる。

この瞬間が大好きだ。

今思い返してみると、私にとってのターニングポイントは2012年の冬。

体力も技術も自信もない初心者の私をチームに誘ってくれた

久保田さん、杉山さん、たけぶーさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

尊敬する方々の創った憧れのチーム「とれいるざんまい」として一緒に出させて頂いて、私は幸せです。

今大会も、苦しみつつも楽しいレースができました。久保田さん、杉山さん、本当にありがとうございました。

参加者の皆さま、お疲れ様でした。色んなドラマをレース後に聞くことで、たくさんの元気をもらえました。

3月に行われた「アドベンチャーレース説明会」に参加してくれた方々、奥多摩の地でお会いできてとっても嬉しかったです。

スタッフの皆さま、本当にありがとうございました。

奥多摩大会 2名カテゴリ 優勝チームコメント

スパモニ探検隊 鈴木 篤さん

まず、2人カテゴリなのに13歳の長男の頑張りを讃えて下さり、先に表彰、賞品授与して下さいました運営スタッフの皆さん、アスリートの皆さん、ありがとうございます。カヤックで一人当たり10分は掛かりますし、人数が増える程にリスクも増えるレースなので、甘えさせて頂いたことは承知しております。

それにしても、後ろから迫る強豪の皆さんがいなければ、あんな力が出せませんでした。まさに「争いではなく競い合うことの素晴らしさ」の恩恵でした。長男は物に執着しない性格なのですが、帰宅後「表彰状はどこ?」と取りに来て、自室に持ち帰っていました。よっぽど嬉しかったのだと思います。参加した皆さんの胸を貸りて貴重な体験をさせて頂きました。感謝致します。

そもそも今回は至ってわがままな理由でのチーム編成でした。

ちょうど1年前の奥多摩大会でアドベンチャーレース(以下AR)デビューを果たした長男(当時12歳、19位)が、この1年でどれだけ力を付けたのか、親として成長を見たかったです。いつものように美人姉妹との参加は魅力でしたが、お姉様が地図読み講習会にまで参加したので、親子と姉妹チームに分かれさせてもらいました。

ARは、田中さん親子の「Keispower!」も那珂川大会に続いて連続完走されているように、親子で大会参加ができる非常に珍しい競技なので、こうした親の喜びも感じられてありがたいです。

その1年前の奥多摩大会で書かせて頂いた駄文で「知った者は伝える義務がある」といったことを述べました。

ARを20年前の極初期に始めた者として、より大勢に知って欲しいという想いを込めた“お願い”でした。

すると、11月の四国大会では、あるレーサーから「体を壊してやめようと思っていたのですが、あれを読んで続けることにしたんですよ」ととても嬉しい言葉を頂きました。

チーム・コナ・ウインの道向さんも会社の同僚に声を掛けられて、これに応えた清水さんが奥大井大会から経験を積み、今回はAR初参加の2人と完走されていました。素晴らしいです。

また、偶然、電車で一緒になった「セブンサミッツ」の3人は、初参加のレースを楽しんで「海外を目指します」と目標を掲げていました。世界に出ることや登山に長けたメンバーなのですぐに行っちゃおうでしょう。夜の飲み会で一緒になった「森 boyz」は、娘さんが同じ保育園のパパ達という異色の編成且つ日米合同チームで、「MTBはどうしたらうまくなる？」など貪欲に尋ね、「今後も続けたい」と仰っていました。他にもそれぞれのチームにドラマがあると思いますので、我部さん、申込み時点でチームプロフィールを提出して相互に閲覧できるようにして下さると交流のきっかけになると思います。

私たちのスパモニ探検隊も、6年間紅一点で走ってきた後藤隊員が妹さん呼び込み(四国大会4位)、その妹さんは彼氏を巻き込み(那珂川大会2人カテゴリー優勝)、四国大会でフレンドシップクラスのみ参加だった大黒隊員と猿渡隊員の2人がオープンクラスにも出るようになり、そして今回の親子チームと姉妹チームでの参加など、この1年で大きく飛躍しました。今回走った13歳長男の下には8歳の二男も控えていますし、妹さんの彼氏の妹さんの彼氏が自衛官とのことで、遠縁ながら目をつけています。縁を頼って仲間となり、年に数回派手に遊ぶ。楽しいことだと思います。

余計かもしれませんが、今回も初参加の方が多かったので、ARの素晴らしい点を挙げさせていただきます。

年齢、性別、関係性が幅広い。カップルや親子で参加可能な競技は珍しい。

年齢、実力に合わせていつまでも続けられる。

競技でありながら、自然が舞台のため記録が大きな意味を持たず、終わりが無い。

海外でも盛んに行われているため、海外旅行を兼ねた遠征も狙える。

様々な地域と自然の中での非日常的な体験は、旅に似て人生を豊かにする。

などなど...

私は山が専門ですが、山も上記の要素に近いところがあります。そして、長い歴史の中でフリークライミングやトレランといった様々な派生スポーツも生じてきました。一方で、偉大な登山家がオリンピックの特別メダルを拒否する例もあり、「あくまで心の勲章」と語る人物もいます。歴史と前例から学んで全体を俯瞰し、どのような形が自分の人生とその世界全体の発展継続に繋がるのか、模索し続けたいと思います。

最後に、長男から「他のチームに比べて『スパモニ探検隊』は名前が普通っぽ過ぎる」と指摘されました。つまり「ダサイ」と言いたいようです。ですが、私達はかつての「水曜スペシャル〇〇探検隊」とは異なり、過去には「4000年前の縄文人全身骨(史上初の自然死状態)発見」(2005年)「1000年前の洞窟祭祀遺跡の発見」(2008年)「“抜け穴”機能を持つ城郭地下トンネルの史上初確認」(2009年)「静岡県最古着工のトンネルの発見」(2010年)「南西諸島最古のウシの骨の発見」(2012年)(他ならぬ長男による)等々、日本考古学会でも発表される探検を続け、現在も行政許可の調査予定を持つ学術探検隊でもあるのです。最近では後藤隊員が福島第一原発に関する日米政府の駆け引きを明らかにし、海外で表彰されています。

長男はまだ探検のロマンを感じられないのかもしれませんが、私達にとってはアドベンチャーレースも立派な探検の一つなのです。

今後もそんな挑戦を皆さんと楽しませて下さい。宜しくお願いします。

長男コメント「宿題が大変でコメントできません。すみません」